県立広島大学人間文化学部紀要　4，161-167（2009）

ふたりのキム－第二次世界大戦期小笠原の朝鮮人

李　　建志

はじめに

小笠原には西欧系島民といわれる人びとが暮らしている。彼らは日本人が移住してくる前に小笠原に渡ってきた西欧系の人びとと、彼らとともにやってきたサイパンやハワイからの移民の子孫である。

現在、小笠原に行こうとすれば、その交通手段はフェリーに限定される。出発地も東京にある竹芝桟橋のみであり、片道25時間の航海を耐えなければならない。また、いちど小笠原（父島）に降りると、帰りの船は自分が乗ってきた船が折り返す時を待たなければならないため、島内で最低三日は泊まる必要がある。このように、小笠原渡航に関する簡単な状況を説明しただけで、やはり小笠原は「孤島」だと思うのではないだろうか。

もちろん、孤島という側面は否定できない。いや、むしろだからこそたくさんの珍しい動植物が保存されてきたともいえる。最近では世界自然遺産に登録しようという動きも活発になるほどだ。

しかし、現在よりももっと船の便が悪かった敗戦前に、小笠原はいまよりも大いに繁昌していたといったら、どう思うだろうか。当時は南洋庁*1への中継地点として重宝された太平洋の要石であり、小笠原からトラック島へ、サイパンへ、そしてパラオへと船が出ていた。人口も7000人に達していたという。現在の小笠原村の人口が2000人弱だから、三倍以上ということになる。

さて、このような地理的な条件から、小笠原の昔からの住人にとっては、サイパンやパラオへの心理的距離はかなり近い。とくに、パラオに関しては「パラオの五丁目」という唄がいまも歌い継がれているなど、唄や踊りでの交流は深い*2。

もちろん、この交流は決して正の部分ばかりではない。負の交流もずいぶんとあったようだ。たとえば奴隷として売られてきた南洋系のひとの話や、朝鮮人労働者の話などは、筆者も驚きとともに聞いた。海軍基地をつくるため神奈川県の小泉組が朝鮮人労働者を連れてきていたといい、その小泉組の経営者は、小泉純一郎元首相の祖父に当たる人物だという。

そこで今回は、小笠原の西欧系島民の古老であるＸ氏へのインタビューによって浮き彫りになった、ふたりの朝鮮人についてまとめてみたい。ふたりの朝鮮人は、ともに金という姓を持つものであったようだが、下の名前までは覚えていないという。インタビューは2006年８月24日の午後と、翌07年９月16日の午前の二回に分けて行われた。いずれもＸ氏の実家の民宿（小笠原村父島字）での面談となった。

Ｘ氏は八十代の男性で、敗戦前は霞ヶ浦にある少年航空隊に入隊していたという。その風貌から白人と見られることが多く、ずいぶんと苦労したようだ。いまでも「日本（人）」という集団に対しては、時に激しいことばを用いて反発心をあらわにする。その反動か、ふたりの朝鮮人に対する受け止め方は寛容なように思えた。彼の母方の兄（ルファス・ワシントン）の一家は、明治末年に朝鮮の親日開化派官僚で政争に敗れた金玉均（キム・オクキュン）が、日本政府によって小笠原に送られたとき、その応接を担当したというから、幼心に聞いた朝鮮貴族の話が、朝鮮人に親近感を持たせたのかも知れない*3。以下に、Ｘ氏から聞いた内容を記す。

1　歯科医師の金氏

X氏がより親しくした金氏は、歯科医専出のインテリで、10才年上だったという。しかし、「父ぐらいの年齢だった」ともいっており、釈然としない。敗戦時、X氏はまだ18才の青年だったのだから、おそらく三十代半ばぐらいだったのではないか。彼は小笠原の海軍病院の歯科医師で、島の女性と結婚していたという。その女性とは、明治期にトラック島から移住してきた実力者・森コベンの孫娘だったという。森家はトラック人で、孫娘の名はアキといったそうだ。

この金医師は、16才で朝鮮から日本の熊本に移り住んで、専門学校まで終えている。X氏の証言では「英語は達者だったが、朝鮮語は不得手だった」とのことだ。思春期に日本語の世界に投げ出され、しかもその日本語がマジョリティによる支配言語であったことを考えると、必死に日本語を習得しようとしたのではないかと思われる。おそらく、その日本語習得と反比例して、朝鮮語が縁遠くなってしまったのかも知れない。もしも彼の年齢が、敗戦時三十代半ばだったとしたら、朝鮮での生活より日本での生活が長くなっている。だとすれば、朝鮮語をかなり忘れていた可能性はある。

池田氏は敗戦まで東京におり、その後、家族とともに小笠原に帰っている。小笠原では大戦末期に「邪魔になる島民」を強制的に「内地」へと引き上げさせているから（1944年）、家族もみな東京にいたという。小笠原が米軍に占領されると、西欧系島民だけは帰島が許された（1946年）。米軍に利用されているのであるが、それでも故郷に帰れることをみな喜んで帰ったという。Xさんもそのひとりだ。

金医師は敗戦までトラック島の日本海軍で働いていたが、米軍による占領後もしばらくトラックにいた。その後、X氏は、米軍によって「通信技術の習得」のためにサイパンのコミュニケーションスクールへと送られた。このときトラック島からサイパンに送られたのが金医師だった。なぜX氏が選ばれたかというと、彼が航空隊にいたころオペレーターの資格を取っていたため、無線士の資格を取得しやすかったからだろう。金医師は獣医のライセンスを取るべく送られたという。これも、彼が歯科医師の資格を持っていたからであろう。

後に見るように当時の小笠原には「父島事件」の事後処理があり、敗戦直後の日本軍人軍属は自由ではなかったはずだ。それだけではない、太平洋の島々で、日本軍は見せしめ的軍事裁判に次々とかけられているので、それほど自由があったとは思えない。にもかかわらず金医師だけは自由が与えられている。おそらく、彼が英語が達者であったということと、朝鮮人であったということで、他の軍人・軍属とは区別されたのではないか。

X氏はカマボコ兵舎で寝起きしながら学校に通ったようだ。兵舎から3キロ離れたトゥンヌク村というところに住んでいたという。金医師は、やはり医者は重宝されるのか、少し待遇面では恵まれていたようだ。彼は日本語でしゃべる相手がいないことを寂しがり、よくX氏を呼んで酒を飲んだという。X氏には刺身をふるまったが、金医師は刺身が苦手だったという。確かにもともと朝鮮には、日本のようなかたちで生の魚を食べる風習はなかった。また、X氏は風貌は白人のようであっても、食性は完全に日本のそれであることがわかる。

昭和28年（1953年）にX氏は無線士となり、小笠原に無線局を運営する使命を帯びて帰島する。それまでは手紙のやりとり（サイパンとの）も、いったんサンディエゴを経由してから届けられるかたちだったから、一通の手紙を送るのに3～4ヶ月かかっていたという。X氏の活躍でこの不便さがずいぶん解消されたことだろう。

ここで、X氏は金医師とは別れたようだ。その後、連絡などはないという。

2　軍属「金村モクセイ（？）」

前出の金医師が、小笠原の朝鮮人の光の部分を背負っていたとすれば、これから話す金村軍属は陰の部分を体現しているといっていい。彼の存在は、日本のアジア・太平洋戦争における最大の暗部のひとつともいえる「父島事件」と絡んでいるからだ。

秦郁彦氏は「人肉事件の父島から生還したブッシュ」*4のなかで、立花中将と的場少佐を中心とした将校が、酒のつまみとして米軍捕虜を喰ってしまったという事実を伝えている。当時、父島に配属され、的場に仕えていた寺木忠軍医は、その著書『告白の碑（いしぶみ）』（人間と歴史社、1979年）において、無理に人肉を料理させられ、喰うことも強要されたという内容を書き記している。決して飢餓状態ではなかった小笠原で、このような事件が起きたことは、的場や立花の人間性によるものだけに帰せる問題とはいいがたい。「集団的異常心理」や、「処刑と人肉食が硫黄島上陸の直後に集中しているので、苦戦する友軍への同情が、復讐感情の爆発をもたらしたと見る向きもある」が、それだけではなく、

> たしかに捕虜になるのを禁じられた日本人に敵の捕虜を愛護する感情が生まれるはずはなかった。孤島父島の将兵は、いわば逃げ道のない袋のネズミであった。きっかけがあればその抑圧感からモラルがとめどなく堕落していく可能性はあったと思われる。

と述べている*5。

この事件が米軍に発覚することをおそれた小笠原駐留の日本軍隊内で口裏を合わせ、隠蔽工作をしたのにもかかわらず、やすやすと発覚してしまったという。これについては、軍内部からの密告、西欧系島民の軍属からの密告など諸説あってはっきりしたことがわからないと、秦氏は述べている*6。しかし、先のX氏は、情報をもらしたのは金村という名前の朝鮮人軍属だったと語ってくれた。

金村は当然、創氏改名による日本名だが、X氏の記憶では「金村モクセイ（？）」といったという。ひょっとすると本名が「金木犀」だったのかも知れない。なにやら暗号めいた名前だが、可能性はある。

X氏の証言を再現しよう。これは、2007年の調査での話だ。

X氏「米軍が小笠原に入ってくるとき、日本軍に武装解除しなければならなかったんだけど、そのときに通訳に立ったのが、その金村だったんだ」
筆者「金村は日本軍の軍属だったんでしょ？　なら、どうして米軍の通訳になったんですか？」
X氏「金村は英語が達者だったんだ。それに、朝鮮人は日本人にいじめられてたから、こういう時（日本人の権力が崩壊した敗戦後 ── 筆者註。以下、カッコ内は同様）はそうなる（日本を裏切る）ものだよ。ぼくは悪いとは思わないね」
筆者「そうですか。で、金村氏はどこで通訳したんですか？」
X氏「船からさ。船の上で、拡声器持って、『おい、出てこい』とかいってね」
筆者「ということは、船に乗ったっていうんですね。米軍が上陸する前に」
X氏「そうそう」
筆者「それは、どういうルートで米軍にひきたてられたんでしょうか？」
X氏「自分からいったんだよ。船に乗って、英語で交渉して。英語がよくできたからね」
筆者「そうですか」
X氏「それでね（笑いながら）、出てきた（日本軍の）兵隊に向かって『武器を捨てろ』っていって

ね。武器を捨てたら、今度は『服を脱げ』って。それで、物陰で軍服を脱いで出てきたら、『フンドシも取れ』っていったんだ。それで、『前へ歩け』っていって、そして逮捕されたってわけだよ」

すでに述べたように、X氏は1946年に小笠原に帰島している。だとすれば、この光景を直接見たわけではないことがわかる。しかし、昨日までの支配者が捕虜へ転落するわけだから、それはとても衝撃的な事態だったとは想像できるので、周囲にいた人間には話として伝わっていたのであろう。そして、多少の誇張を含みながら広がってしまったのではないか。ほんらいは洋名と呼ばれる先祖伝来の名前を持っていた彼らが、日米開戦を前後して名前を捨てさせられているという事実から考えても*7、また強制的に故郷である小笠原から引き離されてしまったという苦い体験から考えても、そして人肉を酒のつまみに喰らうほど倫理観のない将校に支配されてしまっていたという旧支配者への不満からも、マイノリティとしての西欧系島民のルサンチマンが没落した日本軍への蔑みに転化した可能性は高い*8。それにしても、この話はある程度は本当ではないかと思う。それは、実際問題として通訳が必要な事態になっており、西欧系島民が「英語が達者だ」と太鼓判を押す金村が、通訳を仰せつかったとしても不思議はないのではないかと考えるからだ。最初は日本軍の対米軍通訳として起用されたのかもしれない。しかし、金村は裏切ったのだ。

先の人肉事件の話を聞くにつけ、小笠原の日本軍のモラルは相当に狂っていたはずだ。だとすれば、朝鮮人軍属に満足な対応をしたとは思えない。その対応のまずさが、米軍の天下となった小笠原で、「謀反」の引き金を引いたのではないかという想像は、それほど的はずれなことではないと思う。

X氏がいうとおり、もしも軍属たる金村が、その英語力を駆使して人肉事件などの捕虜虐待を暴露していたとすれば、人肉事件の発覚経路はかなりわかりやすいものとなる。たとえば秦氏はこう書いているのだ。

つづいて芋づる式の逮捕が始まった。たちまち立花、的場への憎悪と怨嗟の声が父島の兵士たちの間に満ちた。「俺たちの酒をあの畜生めが飲んじゃったのだ。俺は三度もぶんなぐられた。人間じゃないんだよ。奴らは」という式で、堀江（芳孝。参謀にして父島の良心といわれていた。ー引用者註）はなだめてまわるのに一苦労した。軍紀は完全に崩壊したかに見えたが、数十人の下士官兵が的場にリンチを加えようと押し寄せたときには意外な光景が出現した。

向こう鉢巻に素手の的場が飛び出して「貴様たち、何をするか！」と一喝すると、一団は意気地なく後ずさりして、クモの子を散らすように逃げ去ってしまう。*9

このような、軍の命令体系が破綻したとはいえ、上官には逆らえなかった下級兵士の状況に鑑みると、軍内部からの密告が有力とも思えない。ことは人肉食だ。上官に逆らえないだけではなく、もしも発覚したら単なる部下であったものまで見せしめ的に処刑されかねないではないか。西欧系島民の軍属が密告したというのは、彼らを「ガイジン」視した当時の小笠原兵団の差別意識とからんでいるように思える。それよりも、英語が達者で、その上「野卑な上官」の下で軍の下働きをさせられていた朝鮮人軍属が、日頃の恨みを返すように密告したというのがしっくり来るのではないか。これはおそろしい想像だが、軍属といえば軍隊の統制下におかれるものの軍人としては扱われない最下層に属する。だとすれば、屍体処理などを受け持つこともあったはずだ。捕虜の人肉を調理したとしたとすれば、その調理要員として軍属はこき使われたことだろう。やがて、人肉を調理することを手伝わされた朝鮮人軍属の金村は、自らの保身と、罪の償いとして、事件の全容を米軍に告げたのではないだ

ろうか。

ちなみに、X氏がサイパンで通信技術の学校を終え、ネイビー・オペレーション・ベース（NOB）の通信隊に配属されていた頃、いちどサイパンで金村に会ったといっている。さらに、X氏の親類が70年代の初頭にニューヨークの街頭で見かけ、声をかけたことを伝えてくれた。だが、その後の行方は杳として知れない。

むすび

以上が、X氏からうかがった話のすべてである。これらの話は、ほんらいは単なる個人的な体験で終わってしまうような話かも知れない。しかし、筆者はこの話を聞いて、なにかしら記録に残しておきたいという衝動に駆られた。それは、小笠原や南洋群島（南洋庁管轄下の委任統治領）に、朝鮮人や台湾人がたくさん渡っているという事実をなんとかして掘り起こしたいという焦りにも似た気持ちと重なるからだ。

おそらくは、トラック島やサイパン、そしてパラオでも、現地住民（ホスト社会）と日本人（ホスト政府のもとにいるマジョリティ）との間隙に入り込む朝鮮人・台湾人（マイノリティ）が、おそらくはマジョリティの支持を争って、現地住民と軋轢をおこしたのではないか、そしてマジョリティに対してもことばに出来ない不満をためていたのではないかと筆者は予想している。今回は、このようなマイノリティ同士のナンバー2争いという、帝国の装置内での相克が「うまく機能してしまった」事例として、小笠原の問題を見られるかも知れないと思い、試験的にX氏の証言をまとめた次第だ。

X氏は日本社会に不満があり、時に激しいことばで日本社会を攻撃する。それは、差別されてきた西欧系島民のルサンチマンだと思われる。その不満のはけ口として、同じマイノリティである朝鮮人労働者に向かうことがなかったのは、X氏の資質によるものか、あるいは小笠原全体のものかはわからない。ただこれだけはいえるのは、小笠原では小泉組によって連れてこられた多くの朝鮮人労働者がいて、なかには犠牲になったひとも多いのに、表だってその調査がされたことはないということだ。現に、X氏も「(ふたりの金という朝鮮人の話を）はじめてしゃべった」といっていたぐらいだ。

もちろん、これは小笠原とその周辺にいた朝鮮人のなかのほんのふたり分の話に過ぎない。小泉組が徴用した朝鮮人労働者がどのような待遇で、どのような仕事をしていたのかなど、これから掘り起こさなければならないことは、山のようにあるだろう。小笠原をはじめ、南洋での朝鮮人たちの動向は、いま忘却されようとしている。これは、ひとり小笠原だけの話ではない。おそらく、トラック島でも、パラオでも同じだろう。緊急の調査が必要とされているのではないか。筆者はこのような問題をこれからも続けて発掘していこうと考えている。

注

*1　パラオ諸島コロールにあった、第一次世界大戦後に日本が手に入れた「委任信託統治領」を管轄する官庁。1922年に設置された。ドイツ軍から奪った当初（1917年）から数年は、軍政がひかれていた。当時は東南アジアと区別して、「裏南洋」とも「内南洋」とも呼ばれた。

*2　もともとは「コロールの五丁目」だったが、いまではコロール島といっても親しみがわきにくいので、復帰後（1968年）「パラオの五丁目」へとあらためたという。

*3　X氏は「幼い頃、写真とか朝鮮の服とか家にあって、見せてもらったことがあるけど、あんまり興味なくてしっかり聞いてなかったんだ」と告白してくれた。

*4 『昭和史の謎を追う』第29回、『正論』1991年８月。

*5 前掲書、p394。

*6 前掲書、p391。

*7 このあたりの話は、拙著『日韓ナショナリズムの解体ー「複数のアイデンティティ」を生きる思想』（筑摩書房、2008年）の終章「名前とアイデンティティ」で詳述した。参照されたい。

*8 X氏からも、的場が宴会で人肉を喰っていたという話を聞いた。そして、戦争が終わって、西欧系島民が帰島したあと、50年代に処刑されて喰われてしまった捕虜の遺族が父島にやってきたことを話してくれた。そのとき、X氏をはじめとした西欧系島民は、その遺族に「この日本人め！」という目でにらみつけられたというのだ。しかし、彼らが日本「本土」で、あるいは戦前の小笠原で、決してひとしなみにされていたわけではないことは、拙著「名前とアイデンティティ」（前掲『日韓ナショナリズムの解体』）で明らかにしている。ここにも、彼らの立ち位置の難しさが見て取れる。

*9 前掲書、p391－p392。

県立広島大学人間文化学部紀要　4，161-167（2009）

Two Koreans on Bonin Islands in the days WW II

Lee Kenji

This is a paper of aural investigation on Ogasawara island, 2006. In W.W. II, Koreans was inducted into the Japan Army under complusion. An informant who was born on Ogasawara island in 1920's remambers two Koreans clearly. A korean was a dentist , and the other one was civilian war worlker. There had same last name, had been able to be good at English.

The informant was send to Chuuk Islands to complete a correspondent corse by U.S.A. military gavament of Ogasawara(U.S.A. army established a militaly administration for 1945 to 1968). He met the dentist on Chuuk islands. The dentist was good at Jpanese and English, but weak at Korean. Becaus he was born in Korea, but has grew in Japan, Kumamoto.

The other Korean, the civilian war worlker had been involved in Ogasawara Case. Matoba-Shoi(army officer) orderd to eat prisoners of war in 1945. This case was secrecy, but disclosed the kept secret by the civilian war worlker's korean. Japan Army had treated POW and Korean civilian war wolkers cruelly on Ogasawara. Mr Kim had a grudge to Japan Army, and got himself revenge. Matoba ordered to cook POW, and to dispose of POW's dead bodies to Mr. Kim and other civilian war worlkers. The informant said "It is natural that Mr. Kim disclosed the secret for him revenge".

This report is verry importnt that there is a little report to investigate actual condition of Koreans at Pacific Islands in W.W. II.